

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370346

研究課題名(和文) 文芸キャバレーにおける文学とシャンソンの影響関係

研究課題名(英文) Interaction between literature and chanson in artistic cabarets

研究代表者

吉田 正明 (YOSHIDA, Masaaki)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：20191611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)： 今回の調査研究を通じて、『歌うパリ』など日本では入手困難な多くの貴重な資料や文献を収集した。

それらの資料に基づいて、19世紀後半モンマルトルに誕生した文芸キャバレーに集ったシャンソニエと詩人との交流の実態や影響関係を明らかにすることができた。またこれまで日本ではあまり知られていないシャンソンサークル「赤いミューズ」に関わった詩人やシャンソン作家の実態をある程度把握することができた。

またこれらの研究を通じて、日本における学術的シャンソン研究の発展に寄与することができた。

研究成果の概要(英文)： First of all, we could discover and collect various valuable literature and documents including records of original chansons and some text of songs with musical note and illustration as "Paris qui chante".

Secondly, through analyzing these sources, we could study the realities and interaction between poets and chansonniers going to artistic cabarets in the second half of the 19th century. We could also find some realities of poets and songwriters of "La Muse rouge" almost unknown in Japan.

Thirdly, through these researches we could contribute to the development of academic research of chanson.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 シャンソニエ 文芸キャバレー カフェ・コンセール

1. 研究開始当初の背景

(1) 2004年にフランス国立図書館においてそれまで未整理であったシャンソン関連資料の調査と整理がようやく進み、シャンソン研究の基盤が整えられた。

(2) しかし日本では、シャンソンの学術的研究はまだあまり進んでおらず、19世紀後半から20世紀初頭にかけて隆盛した文芸キャバレーやカフェ・コンセル、あるいは労働者階級出身の詩人やシャンソニエたちのシャンソンサークルなどの実態については不明な点も多かった。

2. 研究の目的

(1) 19世紀後半から20世紀初頭にかけて、主にパリの文芸キャバレーに集った詩人、文人、シャンソニエ、画家、彫刻家、役者、音楽家、ジャーナリスト、批評家などの交流の実相を調査し、それらの影響関係を探ることで、シャンソンと文学との緊密な関係を跡付けるとともに、シャンソンがフランス詩やフランス文学に与えた影響を明らかにする。

(2) 普仏戦争の敗北によるドイツへの怨恨がまた根強く残っていた20世紀初頭のフランスにあって、社会主義、無政府主義、自由主義、革命派などその主義主張は異なっているが、平和主義の立場を貫いた労働者階級出身の詩人やシャンソニエたちの活動の拠点となったシャンソンサークル「赤いミューズ」の実態を調査し、これらの労働者階級出身の詩人やシャンソニエたちの歌やその歌に込められたメッセージを読み解くことで、こうした政治的社会的なシャンソンがどのような土壌の下で誕生し、後のセーヌ左岸やサン・ジェルマン・デ・プレなどの文芸キャバレーで活躍する詩人や作家や作詞家やシャンソンの歌い手たちにどのような影響を及ぼしたのかを調査研究する。

(3) 本研究を通じて、まだ本格的な研究がそれほど進んでいないわが国において、シャンソンの学術的研究の基盤を整備しその発展に寄与していく。

3. 研究の方法

(1) これまで民衆的シャンソンが近代フランス詩に与えた影響やフランス民謡の特質などを研究してきた研究代表者と、近現代シャンソンの精密な歌詞分析とその文化的基層を研究してきた研究分担者2名による共同研究である。

(2) 研究に必要な文献や関連資料(文

学作品、歌謡集、雑誌、回想録、ポスター、書簡、音源等)の調査収集を、フランス国立図書館、アルスナル図書館、パリ市歴史図書館、モンマルトル美術館等で広範囲に実施し、収集したそれらの文献や資料の調査研究と分析を通して、文芸キャバレーの成立過程とその内実及び発展過程を明らかにする。

(3) 研究代表者と分担者は、日本におけるシャンソンの学術的研究を推進するために「シャンソン研究会」を立ち上げ、春と秋の年2回定期的に研究会を実施している。研究会において研究成果の発表を行うとともに、会員間で本テーマに関して議論を深め、学会でシャンソンをテーマにしたワークショップを行うなどして、研究成果の発信にも努めた。

4. 研究成果

(1) フランス国立図書館やモンマルトル美術館、あるいはアルスナル図書館などでの現地調査を通じて、19世紀後半からベル・エポック期にかけて隆盛した「黒猫」などの文芸キャバレーやムーラン・ルージュなどの劇場の様子や、「カラデック蔵書」などシャンソン関連の貴重な文献資料を調査することができ、文芸キャバレーやカフェ・コンセルに関する多くの情報と資料を得ることができた。入手した資料のなかでも1903年に創刊された『歌うパリ』Paris qui chanteは、歌詞と楽譜とともにポラン、メイヨール、ドラナム、フラグソン、ジュール・ジュイなど当時人気を博した個性的なアーティストやシャンソニエたちの歌芸の様子をイラストをふんだんに鏤めて紹介した週刊誌であり、視覚的にも当時の歌手たちのパフォーマンスの様子やいで立ちなどが明らかとなった。

(2) 文芸キャバレーの嚆矢「シャ・ノワール」以前の文芸サロン(ニナ・ド・ヴィラルルのサロン等)や詩人サークル(「イドロパット」等)の実態を明らかにするとともに、文芸キャバレーに集った詩人や作家(エミール・グドー、シャルル・クロス、アルフォンス・アレー、ヴィリエ・ド・リラダン、レオン・プロワ、マリー・クリジンスカ等)とシャンソニエたち(ジュール・ジュイ、アリストイド・ブリュアン、モーリス・ロリナ、モーリス・マックナブ等)及び音楽家たち(シャルル・ド・シヴリー、アルベール・タンシャン、ジョルジュ・フラジュロール、ドビュッシー、エリック・サティ等)との交流と影響関係が明らかになった。

(3) 1901年にピエール・ニトゥによって創設された「社会主義的詩人及びシャンソニエグループ」から生まれ1939年まで存続したシャンソンサークル「赤いミューズ」に関わ

った詩人やシャンソン作家の実態がある程度明らかになった。このグループにはグザヴィエ・プリヴァ、シャルル・ダヴレ、ウジェーヌ・ピゾー、ガブリエロ、ジャック・グレロ、ノエル・ノエル、ピエール・ダック等のシャンソン作家がいたが、彼ら以外にも今日では名前すら忘れ去られてしまったシャンソニエも多く関わっていたことが分かり、こうした労働者階級出身の詩人やシャンソニエたちの歌やその歌に込められた彼らのメッセージを読み取ることで、こうした政治的社会的なシャンソンが、「黒猫」などのモンマルトルに誕生した文芸キャバレーの精神を受け継ぎ、それを後のセーヌ左岸やサン・ジャルマン・デ・プレなどのキャバレーやナイト・クラブやカフェなどで活躍することになる作家や詩人や歌手たちに受け継がれていく系譜が明らかになった。

(4) キャバレー新聞『シャ・ノワール』や『ミルリトン』の調査研究を通して、当時の文芸キャバレーが様々な芸術が交錯し影響し合う坩堝のごとき場であり、雑多でポリフォニックな新しい美学とモンマルトル精神の発祥・発信地となっていたことが明らかとなった。

(5) 本研究を通して、日本における学術的シャンソン研究の基盤作りと発展に寄与することができた。その結果、2014年10月25日・26日に広島大学で開催された日本フランス語フランス文学会秋季大会において、シャンソンをテーマにしたワークショップの実施につながった。また、2016年6月25日に東京藝術大学演奏芸術センターが企画する藝大プロジェクト2016「サティとその時代～世紀末からベル・エポックへ～」の第2回企画「キャバレー文化とクラシック」に、研究代表者が「華開く世紀末のキャバレー文化」と題して招待講演を行うことになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8件)

吉田正明、19世紀パリにおけるキャバレーと新聞、シャンソン・フランゼーズ研究、7号、63-80、2015、査読無

三木原浩、ミスタンゲットのシャンソン「パリゼット」をめぐる - 白井鐵造、ミスタンゲット、そしてツクバネソウ、シャンソン・フランゼーズ研究、7号、46-62、2015、査読無

吉田正明、シャンソンにおける反戦・平和主義、日本フランス語フランス文学会 cahier、15号、6-7、2015、査読無

三木原浩、『白井鐵造を巡るエッセー』補遺、

シャンソン・フランゼーズ研究、6号、76-82、2014、査読無

吉田正明、エディット・ピアフとジャック・ブルジャ、ふらんす、10月号、15-16、2013、査読無

吉田正明、三木原浩、パリの文芸キャバレー跡(1945-1965)調査、シャンソン・フランゼーズ研究、5号、54-67、2013、査読無

三木原浩、シャンソン、ことばとの出会い - 『詩人が死んだ時』を巡って、仏文研究、44号、145-163、2013、査読無

三木原浩、白井鐵造を巡るエッセー - リラとスマレとフリーダーと、シャンソン・フランゼーズ研究、5号、39-53、2013、査読無

〔学会発表〕(計 8件)

吉田正明、華開く世紀末のキャバレー文化、東京藝術大学演奏芸術センター主催 藝大プロジェクト2016「サティとその時代～世紀末からベル・エポックへ～」第2回「キャバレー文化とクラシック」(招待講演) 2016.6.25、東京(於東京藝術大学奏楽堂)

三木原浩、シャンソン受容の揺籃期 - 白井鐵造とリラとスマレとツクバネソウ、日本フランス語フランス文学会中国四国支部会(招待講演) 2015.11.21、岡山(於岡山大学)

三木原浩、シャンソンを語る、シャンソンを歌う、サロン・ド・レイ講演会(招待講演) 2014.10.31、大阪(於追手門学院大学梅田サテライト)

吉田正明、シャンソンにおける反戦・平和主義、日本フランス語フランス文学会2014年度秋季大会(ワークショップ) 2014.10.26、広島(於広島大学)

三木原浩、日本におけるシャンソン受容の揺籃期 - 白井鐵造と宝塚、日仏文化協力90周年記念特別講演(浜松日仏協会主催、後援:フランス大使館他(招待講演) 2014.10.5、浜松(於アクトシティ浜松・音楽工房ホール)

三木原浩、「残された時間」への向き合い方 - シャンソン・フランゼーズの歌詞を通して -、死生学研究講演会(招待講演) 2014.7.12、(於甲南大学)

吉田正明、ベルエポック期のシャンソン誌「Paris qui chante」について、第22回シャンソン研究会、2013.11.9、松本(於信州大学)

三木原浩、シャンソン、ことばとの出会い - 『詩人が死んだ時』を巡って、京都大学フランス語フランス文学研究会、2013.5.18、京都(於京都大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 正明 (YOSHIDA, Masaaki)
信州大学・学術研究院人文科学系・教授
研究者番号：20191611

(2)研究分担者

三木原 浩 (MIKIHARA, Hiroshi)
神戸大学・国際文化学研究科・名誉教授
研究者番号：70116177